

## 千葉県環境審議会鳥獣部会キョン小委員会の開催結果（概要）

- 1 開催日時 平成29年8月30日（水）  
午後2時から午後3時55分
- 2 開催場所 千葉県森林会館 5階 第1会議室  
千葉市中央区長洲 1-15-7
- 3 出席者  
【委員】吉田正人委員（委員長）、山崎晃司委員、中村誠委員、榎本文夫委員、  
富谷健三委員、小高政喜委員、平松等委員  
【県】野溝自然保護課長、千村副課長（鳥獣対策）、他自然保護課職員
- 4 議案  
第1号 千葉県キョン防除実施計画に基づく平成29年度の事業実施方針（案）  
について
- 5 報告  
第1号 平成28年度におけるキョン防除事業の実施結果について  
第2号 今後のキョン防除における基本戦略の方向性について
- 6 審議結果  
第1号議案について、原案通り異議なく議決された。
- 7 主な質疑・意見

### 《報告第1号》

問 東金市で被害が出ているが、実際にはどのような被害が出ているのか。（委員）

答 現在、東金市では生息が確認されていないことから、被害内容や真偽について再確認する。（事務局）

意 今まで個体の確認記録がなかった場所についても、市町村に注意喚起を促して情報を収集する必要がある。（委員）

意 県捕獲について、鴨川市では網による捕獲が行なわれていないが、比較する上で捕獲方法は揃えるべき。また、メスを捕獲しなければいけないので、メスの捕獲方法を

開発すべき。(委員)

意 鴨川市の捕獲数が減っている。前年度と比較してどのような捕獲方法で捕獲数が減っているのかを検証すべき。その際にも性比を確認する必要がある。(委員)

答 鴨川市での捕獲数の低下は、個体数を抑制でき始めている、あるいは横ばいにできているからではないかと考えている。捕獲方法別の捕獲数の推移については確認する。(事務局)

意 もし抑制でき始めているのであれば、その方法や効果の検証は重要になる。また、根絶のためにどのような手法が必要かは検討していくべき。(委員)

意 鴨川市はニホンジカの捕獲数も減っている。これが捕獲による効果なのか、それとも捕獲圧が低下しているからなのかを検証すべき。(委員)

#### 《報告第2号》

問 人材育成はとても重要。技術は個々人で異なると思うが、それを共有することはできないのか。マニュアル化などが出来れば良い。(委員)

答 捕獲技術を持った従事者に有害鳥獣捕獲員研修などに講師としておこしいただき、話をしていただくことは可能かもしれない。また、イノシシとシカについては前年度に捕獲マニュアルを作成している。キョンについては、イノシシやシカと比べて捕獲方法が確立していないため想定していなかったが、今後、検討していきたい。(事務局)

問 ネコの錯誤捕獲の割合は把握できているのか。怪我をしている個体もいるのか。(委員)

答 件数までは把握していないが、多く発生しているわけではないようだ。錯誤捕獲された場合は放獣しており、怪我をしたという話は聞いていない。(事務局)

問 ネコが錯誤捕獲されているのは、どのような罠か。箱罠であれば、上に穴を開けるなどの工夫もできるかもしれない。(委員)

答 詳細は把握していないが、くくりわなで捕獲されることがあると聞いている。(事務局)

意 ネコは狩猟保険の対象外。錯誤捕獲されてしまった場合のリスクは大きい。飼い猫

の場合などは補償金を求められることも十分考えられるが、このようなリスクを嫌って、捕獲をしてくれない人もいるだろう。(委員)

意 ネコを大事にしたい人もいるので、ケガをした場合やリリースする場合についても注意すべきだろう。首輪の有無だけで飼い猫かどうかを判断することは難しいので、可能であればすべての個体にマイクロチップを入れることが出来れば良い。ネコの錯誤捕獲によって捕獲事業が問題視されないよう、十分に注意すべき。(委員)

意 嗜好性の高い誘引餌の特定については、これまでも工夫されているはずだが、それでもうまくいっていないことを考えると、専門的に検討していく必要がある。ただし、それにあまり時間を取られてしまうとその間にさらに増えてしまう。そのことを考えると、新たな捕獲方法を開発するなど、「千葉方式」に向けた斬新な発想が必要だろう。(委員)

答 住宅地では箱ワナを使用する必要があるが、箱わなの場合は有効な誘引餌を開発する必要がある。これまでの試験で、アオキやカクレミノの嗜好性が高いことがわかっているが、試験の実施場所等が限定的であるため、引き続き検証する必要がある。また、伊豆大島では一定範囲を囲った上で銃による捕獲を実施している。伊豆大島よりも生息範囲が広い本県において、同様の方法が効果的かはわからないが、このような方法を含めて、捕獲方法を検討していきたい。(事務局)

意 分布域の辺縁部にはアオキやカクレミノが残っている。そのような地域でどのように捕獲するのかを検討すべき。(委員)

意 補助金の増額の検討については、狩猟獣の指定と矛盾が生じてくるので、軋轢が生じる可能性がある。それにより、かえって捕獲の効率が悪くなる可能性もある。(委員)

意 どのような目的で狩猟鳥獣に指定するのかを明確にすべき。狩猟期間中にシカやイノシシと一緒に捕獲してほしいという意図なのであれば、それを明確にすべきであるが、補助金の増額との整合性を含め、目的を十分に検討すべき。(委員)

意 自然植生への影響調査については、防除計画改定の年度に調査をしているのでは間に合わないのではないかと。特に、シカが生息していない場所では早い段階で調査をすべきだろう。(委員)

答 昨年度に自然植生への調査を実施したが、調査方法等に課題が残り、今回は調査結果を提示しなかった。シカとキョンが重複して生息している場合は、どちらの影響か切り分けが難しかった。また、キョンのみ生息している場所では、下層植生に顕著

な影響が出ていなかった。次回の調査時期については再検討する。(事務局)

意 捕獲従事者のモチベーションを高めるために、捕獲個体の資源活用を考えても良いのではないか。(委員)

答 いすみ市では地域おこし協力隊が中心となって、キョンの皮を活用した地域おこしに取り組んでいる。様々な使い道を想定してサンプルを作成しており、市としてはできる限りこの取り組みをサポートしたいと考えている。(委員)

質 GPS 発信機による調査はどのような目的で実施するのか。また、何頭程度に発信機を装着する予定であるのか。(委員)

答 1 日の行動パターンや移動ルートを把握することが目的であり、複数頭の成獣メスに装着する予定。過去の房総のシカ調査会の調査により一部わかっている情報もあるが、まだまだ不明な点が多いので、今回の調査で把握したいと考えている。(事務局)

意 GPS 調査の際に物理的な境界線との関係性も注目すべきだと思う。過去には夷隅川を渡らないという話もあったが、キヨンが橋を渡っている可能性も考えられる。このような点にも着目して調査をするとよい。(委員)

#### 《議案第 1 号》

質 カメラは何台程度使用するのか。(委員)

答 20 台程度を予定している。(事務局)

質 前年度の妊娠率のサンプル数が少なかった原因は何か。今年度は前年度以上のサンプル数を確保できるのか。(委員)

答 植生への影響調査を実施しており、その影響で捕獲個体のモニタリング費用が少なくなった。今年度は植生調査を行わないため、一昨年度と同程度のサンプル数を予定している。(事務局)

質 階層ベイズ法での推定数は今までの手法とどの程度の差異が生じそうであるのか。(委員)

答 どの程度の差が出るかは、計算してみないとわからない。増える可能性もあるし、減る可能性もある。また、同程度の可能性もある。(事務局)

質 妊娠率を考えるとかなりの個体が妊娠していることになる。現行の個体数推定方法では、一定の自然増加率の値を使用しているが、データを元に自然増加率についてもしっかりと検討すべきではないか。(委員)

答 階層ベイズ法で個体数を推定する際に、自然増加率も同時に推定される。予定では、市町村ごとに個体数を推定するので、自然増加率も市町村ごとに推定されるため、地域ごとの違いが把握できるだろう。(事務局)

意 外来種であるキョンは根絶すべきであるので、そのためには今の10倍程度の捕獲が必要だろう。予算に限りがあるのでなかなか難しいと思うが、従事者に捕獲してもらったための予算の確保や体制づくりが必要である。(委員)

意 従事者のモチベーションと報償金は比例するという話も聞いたことがある。特に、特定外来生物のように集中的に捕獲する必要があるもの、通常の種よりも魅力が劣るものについては、重点的に補助金を付けるなどの対応が必要と感じている。勝浦市は鴨川市やいすみ市よりも報償金が低いが、報奨金の増額は市単独では予算的に難しい部分がある、可能であれば県下統一の報奨金を設定し、そのための補助を県にお願いしたい。(委員)

意 今年度から勝浦市でも張り網による捕獲を開始した。また、空気銃を使って捕獲したいという猟友会からの声も出ている。キョンの捕獲をする上では猟友会の協力は不可欠。ぜひ、猟友会や現場の声を事業に反映してもらいたい。(委員)

意 先日の駆除隊の捕獲の事例では、半日でキョンを10頭捕獲していた。今まではあまり銃の捕獲数は多くなかったが、うまくやれば銃による捕獲数を増やせると思う。(委員)